

抗
飛
狂
漢

ナガタスヒサ

■ 吉 発狂する世界

★世界、絶賛発狂中

はいまいどながたです。またまた妙なお嘶に一席おつきあい願いたいと思います。

最近安富歩先生にハマりまして。また巻末にご著書一覽載せますのでぜひお読みいただきたい逸品揃い、本当にありとあらゆる方向からの「知」がてんこ盛りになつて非常に刺激的なのですが、なによりわたくしが心打たれましたのは。

「世界は発狂してる。」

だからもちろん、私もあなたも
ガーン。

私お恥ずかしいことに子供の頃から

「これおかしいやないか!」

とか生意気言つては親先生大人達を苦笑いさせてきたクソガキでして、でも、今振

り返つても、「君が正解」とその時の自分の肩を叩いてあげたいことが多いです。

つまりやつぱり、世界は狂つてるんですよ。

ただ、じゃあなぜ僕の話を大人達はスルーしたかといえば、大人達も狂つてるし、僕も、狂つてるからです。

歪んだ世界に向かつて狂人が喚き散らしてる、のを狂人たちが観てるという地獄絵図です。

「中川家」の漫才に「電柱に向かつて意味と滑舌のわからない話をし続ける大阪のおっさん（手にワンカップ）」というそれ放送していいのか的なネタがありますが、あれです。

しかし、たとえ地獄であろうとも「ここ地獄です・あなた狂人です」と「立ち位置がわかる」と人間ものすごく安心します。

僕はもうホントに物心ついた頃から三十数年の疑問がさらさらと氷解して頭のフタが「ぽかーん」と開いた気分になりました。

人間、やつぱり自分可愛いんですよ。

僕も自分が「愚かである」とか「怠惰である」とか「優しくはない」とは思っていました、まさか「狂ってる」とは思いませんでした。ただその視点を導入すればこの社会から受け続けてきたほとんどすべてのストレスの原因がわかったのに。

さて、ではどうするか。

狂ったもの狂ったままにしておくわけにはいきません、すこしでも自分を、そして社会、世界を「まとも」にした方が、やっぱりどう考えても素敵なわけです。

一つのアプローチとして、「狂った原因」を探ってその原因をひとつずつ潰していく、あるいはそれらを遠ざけていく、というやり方があります。

もう一つは、「まとも」である状態をめざしてそこへ持つていけるようなやり方を考えてみる、というやり方もあります。

もちろん両方使っても構わない。

あ、ちょっと飛ばし過ぎですかね。

「狂ってる」実例は……ひとつだけ挙げるならやはり大飯原発再稼働問題です。

野田首相が「責任をもつて」動かすと言いました。この福島事故も全く解決の目処が物理的にも社会的にもついてない状態で、数万の避難者が家土地財産仕事生計が故郷を喪い流浪の生活を強いられる状態です。ジャーナリストの神保哲生さんが気色ばんで「『責任』つてもし事故起きたらどういう取り方するんですか」と問い詰めれば答えは「事故を起こさない責任です」と。

ハア？

そんな詭弁聞いてませんよね、もし事故したら皇居に向かつて腹かつさばくんですか、マグロ漁船で百万年働いてあなた自身が賠償金を稼ぐんですか、という話です。むしろそういう人を小馬鹿にした答えが返ってくる方がマトモ。

完全に狂ってます。

もちろん首相個人もですが、それを後押しする政府・党中枢、既得権に貼り付く一部財界。「理性を喪つてる状態」を発狂と言わずになんと言いますか。

三・一一事故ではなくむしろ再稼働問題の前後から、毎週金曜日の国会前デモが膨れ上がったのはつまり、根本問題は原発がどうの、再稼働がどうのという点ではなく、「とにかくその理性も理屈も議論もない狂人的決定プロセスを止めてくれ」と、非常に多くの人不安を抱えたから、ではないかと思えます。

この問題についてはそういう人々がそういう狂い方をしてるわけですが、その他にもたとえば各地のいじめ事件。加害者、その親、教師校長、教育委員、若者が一人亡くなつても「私は悪くない」と傲然と言いつつ。しかもいい大人、経験を積んだ年寄が、です。昭和の時代ならば身近でそういう悲劇が起きれば、人はなんの関係も無くとも罪悪感を感じたものです。むしろその（倒錯した）甘美な陶醉感が文学になつたほどなのに。

その他あの問題この問題その問題、今起きてるほとんどすべての難問が「当事者全員が狂つてる」と考えたと「ああ……」と納得してしまいませんか。

「そんなこと言い出したら『ストレス』で全部片付ける医者みたいやん」と思いかも知れませんが、でもそうであつたとしてもストレスゼロに越したことはないですよね。

またむしろ「発狂」ならば「目を醒ます」ことも可能かもしれませんが。悪意や愚鈍はなかなか直りませんし直せませんが、狂気はある一瞬で「醒める」可能性がある。

発狂からの脱出法、考えてみましょう。

★ 「仮面」 仮説

まず最初のアプローチ、「発狂した原因」の方を軽く探ってみます。軽く、と言いますのは僕には学識も研究経験もありませんので、仮説に裏付けが無いんです。なので話半分で聞いてください。

原因は「仮面」だと思うんです。

原始、人間は「社会」を作る時、それこそ家族の誰かという近い人間とでも、コミュニケーションを円滑に行う必要が生じた時、「仮面」を被ることを、どこかの段階で覚えたんだと思います。

私達も日常、誰かと接する時、「生」の自分ではありえませんが、どこかを隠し、どこかで嘘、というと言い過ぎなら装飾をします。しかしそれによっておたがいに「話を通じて」物事がうまくいく。

この「仮面」が便利すぎ、かつそれが生み出す大きな「社会」にメリットが大きすぎたので、人はいつの間にかこの「仮面」システムを愛用しすぎました。

すなわち、「生の自分」ではない、「別の自分」で生きること慣れすぎました。

どんなシステムでも「強み」こそがある点を超えると「弱み」に一八〇度ひっくり返ります。

このあまりの便利快適安心安全を与えてくれる「仮面」はいつしか強大な権限を持つようになり、「生の自分」を喰い、まるでそれこそが「自分」であるかのよう
に振る舞い始めます。

「本当の自分がやりたいこと」「魂が求めるもの」ではなく、仮面の欲求に従う毎日を送らざるを得なくなる。

この自己欺瞞、自分を騙す日々こそが、「狂った」状態、発狂状態です。

だからこの矛盾点をたまたま突いてしまったりすると、人間は非常に簡単に発狂
します。

「ああ俺、やつぱりミュージシャンになりたかったなあ……」

「今からでもなればいいじゃん。いまYouTubeやニコ生あるからなんぼでも聴いてもらえるよ」

「だこわtふおうfd；あおいえある；fがdさえ」

こんな感じ。思い当たる節がありませんかご自身にも。

日本語を言い換えれば「立場」と「本心」。もちろん人が社会的な生き物である以上、完全に一致させるのは物理的に難しいのですが、必要以上に「本当の自分」

|| 「魂」を虐げている……のが、現代人だと思えます。

★仮面の発達理由

なぜこういう社会になったのか、という点の追求には知的好奇心が踊ります。

「自由」という名で逆に「選択のストレス」という知恵の実を与えてしまったプロテスタンティズム。同様に資本主義、全世界の社会のあらゆる階層に同じ価値観と効率・スピードを求めるグローバル化の波。商品サービスの猛烈な「『可能性』」の

嵐」に晒されてまともな判断を（意図的・結果的双方で）喪わせる商業主義。先進国ではある程度の生活の安全快適が確保され、「現状維持」こそがコストパフォーマンス的に最高の生存戦略になってしまったがゆえの「保身」および「無関心」という行動様式。

そしてそれらと相互作用しながら発達・変化した「世話はするが愛さない」教育システム。都市化やネット化により「匿名性」が確保され暴走する仮面・化身（アバター）同士のコミュニケーション。複雑化・専門化した社会問題に対応できない政治・統治システム。

ひとつひとつが大きな研究対象になりうるほど根の深い問題ですが、今はとりあえず、「それら様々な要因との相互作用、フィードバックを繰り返すことによつて、人が被る「仮面」こそが逆に人を苦しめている」という現実に目を向けてみます。

★3つのポイント

「仮面」が問題を引き起こすならば、「生の自分」その人個人に立ち還る、というのがまず大前提となります。

そこでまずは安富先生の御本を読んで僕なりにまとめた、3つのポイント。

● 一 ハラスメントをしない・させない

「ハラスメント」とはセクハラなどでおなじみの、人に対する心理的・物理的な嫌がらせや圧力、圧迫のことです。

相手を圧迫すればするほど、防御のために「仮面」が発達し、その偽の人格、

「仮面」を用いてこちらに迫ります。それに対してこちらもまた防御反応を起こし、「仮面」を強化して挑みます。

この悪循環、悪いフィードバックこそが、おたがいをわけのわからないところへ連れていきます。

国際問題などでも相手の国の人個人として付き合い合えば別段普通なのに、「○○国人」になった瞬間、お互いを悪魔の集団のように憎しみ合う、ということがあたりまえにあります。

相手の仮面をできるだけ軽くし、自分の仮面も制御可能な状態に留めるには、こ

の種の圧迫、ハラスメントをしないこと、です。

そしてさせない。

相手は無意識にやつてることかもしれないし、それがハラスメントに相当すると思つてないかもしれません。理性的に「それは困るので止めてほしいです」と留めれば済む話も実際は多いものです。

こうしてお互いの仮面を軽くする。

ハラスメントにはもちろん、言葉によるものも含まれます。最近ではツイッターやフェイスブック等SNS、知らない人と仮面を被つたままダイレクトにコミュニケーションできてしまうツールがいろいろありますので、思わず強い言葉で圧迫を掛けてしまいがちですが、まずその「仮の名」の向こうには「生の個人」が居ることを思い出さねばなりません。

どうしてもやつてくる人はブロックなどツールに備わつてる機能でハラスメントを遠ざけましょう。

自分の手からナイフを置くと、不思議なもので相手のナイフについて逆に冷静になれるものです。ナイフを持つからこそ、むしろ「やるかおらあ！」と盛り上がる。

「怒り」や「武装」の本質です。

逆に自分が攻撃を仕掛けないと、実は精神的に絶対優位に立てる。
なぜなら、罪悪感がないから。

この内なる罪悪感こそが自分の仮面を強化する非常に大きな要因です。（ですから、物の見方を変えることで、感じなくていい罪悪感を払拭し、自分の仮面を軽くすることもできます）

とにかく積極的に「相手を傷つけない」そして「自分も傷つけさせない」という意志を確認する。それが「ハラスメントをしない・させない」です。

●二 魂のしあわせを追求する

ちよつぱり前述しましたが、「本当に自分が求めているものは何か」というのは実はなかなか見えないもので、僕も実はよくわかってません。

ただそれは、本当に「内なる声」あるいは「実感」、しんみりと心の奥底からじーんと「ああ、しあわせだなあ……」と感ずること、によってしか認識されないもの、かもしれない。

僕の例で言いますと、僕はこうして「なにか文章で描いてること」が「しあわせ」で、完全に本末転倒ですが、内容なんでもいいのでずーっと描いてたいぐらいです。

ですがそういう「やむにやまれない」ものこそ「しあわせ」でしょう。それに従う。

ただこれは、すぐそのそばに仮面を被るストレスからの「逃避」と、真の自分から目を逸らす「暇つぶし」があります。

ここにずっぽりハマってしまうと、まるで自分に言い聞かせるように「僕はこれが好きなんだ」とその物事に拘り、周囲から見ても異常な行動に走ってしまいます。

(まあ僕の日がな一日キーボード叩いてる行為も異常といえば異常ですが)

特に今はネットありますので情報はタダでなんぼでも、ブツも通販オークション等々で金にあかせていくだけでも手に入りますので、恐ろしく「暇をつぶしやすい」環境です。

この罍を避ける決定打は無いのですが、時々自発的に「我に返る」必要があるのかな、と思います。

俺はこのネットゲのプレイ時間一年超えたけど、果たして本当に楽しんでるんだろうか？

微妙に思えば、休めばいい。

なんでもそうですが「やめる」と考えると今度はそちらのハードルが上がるので、「わからないことはとりあえず立ち止まる」というのも知恵です。

ともかく自分の、胸に手を当てて「ホンマにそうなんか？」ということを中心に、それからカラダにも聞いてみる。そして「やつぱりこれがいい！」と思ったらそれに突っ走る。

●三 学習回路を開いておく

孔子様曰く、「知とは知と不知とを分ける運動そのもの」です。

つまり、「知る」ということは「真実」としてどこかに転がってる固まった「何か」を掴み取る作業ではなく、常に自分の知っていることを知らないことから切り出していき続ける作業であり、だから昨日の「真実」が今日は嘘または間違ひまたは虚構にもなります。

これをこそ「学習」といいます。

暖房器具のサーモスタットのように環境に与えた影響を測って自分の動きを調整する機能を「フィードバック」と言いますが、そこからさらに一段進んで、この影響を測り作動システム自体を変化させていくこと、これを「学習」といいます。

人間の学習はもちろん、本来、こちらです。

誰か偉人の発明した知識体系を丸呑みしたりそれを使いこなすことではなく、それらによって自分の中に自分流の知識体系を組み立て、常にそれを更新し続けていくこと。

これが「知」です。

そのためにはオープンマインド、常にココロとアタマを開いて、起きている事実を虚心坦懐に観て、そこから得られる見識を自分の中に組み込み、自分自身を変化、つまりこれが進化、させていく心構えと意志が必要です。

余談ですが人間を動物と一番隔てるものはおそらくこの「進化への意志」でしょう。

「もつとよくなりたい！」

「もつとよくしたい！」

という意志をこうも強く持つ動物を寡聞にして他に知りません。

(もちろんそれが大きな副作用も生んでいるわけですが)

「変化を恐れない」ことこそが、逆説的なようですが、「自分自身であること」の最も大きな担保です。

そのことによつて外部の何かに取り憑かれることなく、誰かの人生を生きることもなく、自分個人でいられる。

★自力と他力

以上が「個人に立ち還る」3つのポイントでした。まとめますと

- 一 ハラスメントをしない・させない
- 二 魂のしあわせを追求する
- 三 学習回路を開いておく

これらに注意し、「正しいあり方」へのコツコツとした努力を続ける、これが王道です。

ただ、私達は人間でして、人間というものは私も貴方も！全く怠惰で愚かなもの、「いいとわかっていても」サボったりするものです。全員がいつもなににでも努力できれば、こんなにダイエット本は売れないし禁煙外来は流行らないでしょう。

ですから、これは「あるべき姿」の努力目標として掲げ、思い立った時になるべく実行する、ぐらいに留めておかないと、逆にストレスとなり、「あるべき自分」という仮面を強化する逆効果になります。

親鸞上人曰く、「自力」で救われるというのは大変難しい、いや事実上不可能に近い。

ではどうするか。

「他力」を考えるわけです。

いつたんどこまでも救つてくださる阿弥陀様を認識し、「ああ阿弥陀様お救いください」と唱えた瞬間、つまり「『私は救われるものだ』と認識すること」そのものが「救い」である。

先の孔子様の「知」と同じ構造です、「救い」はどこかにあるもの・誰かが成してくるものではなく、自分自身が運動として手にするもの。これこそが天才・親鸞が大転換した「救済」の構造すなわち「絶対他力」です。

だからこそその悪人正機、「ああ俺みたいなのは救われねえだろうなあ」と思った瞬間、「救い」という構造を認識した瞬間、その人は救われる。

何らかの外部性にとりすぎることでも、自分自身が身を処して救われると思いつむことでもない。それは「知」に置き換えてみれば理解しやすいと思います。

ではこの場合、具体的にどうすればいいのか。

それは、阿弥陀様を自分の生活に組み込むことだと思います。

特に努力しなくても「勝手に」仮面を突破してしまうようなやり方を日常に盛り込む。

いわば家事をして駅まで歩けば運動不足にはならない、そういう組み込み方です。

そんな都合のいいことができるのか。
僕ができる、と思います。次はその手段、
「非線形日常」の解説です。

■式 非線形な日常

★非線形科学

この五〇年急速に進歩したのが非線形科学です。対象をバラバラの要素に分解してそこにある普遍的な関係を見出すのではなく、対象を対象のままに観察し記述する試みによつて世界を認識していく。ニュートンデカルト以来猛威を振るい続けている前者の認識方法・科学に対して、それでは描けない領域までも、むしろそういう領域をこそ描写する科学です。

水をビーカーに入れ下から熱しますとそのうち「対流」が始まります。それまでバラバラに動いていた水分子が、ある時点で近くの分子たちと一緒に同じ方向に向かって動いたほうがエネルギー的に有利になり、一斉に同じ運動を始める。

突然、まったく違う動きが生じる。

線形な動き、二倍の入力があれば二倍の出力がある、と予想できる動きではなく、何を入れると何が起こるかわからない。これが非線形領域です。

ゴム紐を引つ張つていくと「予測不能な」どこかでプチンと切れまじし、スマホがやつてくるとある時期を境にみんな一斉に今までのガラケーを放り出し、うわ言のようにスマホスマホ言い出すのです。

ここでだいじな点が、日常、私達の世界というものは、それが物理的な世界であれ社会的な世界であれ、この「非線形領域」の方が遥かに大きい、という点です。

そして人々を悩ませる激動、大きな問題はその線形の領域から非線形の領域に移る一点、ブレイクポイント（これは僕が今名付けただけです）で起きます。

ということ。

「世界が非線形である」という「正しい」認識を常に持ち続けること、は、狂気から脱しマトモになる第一歩にはならないでしょうか。

世界は非線形であり一瞬先に何が起こるか分からない……そう、「諸行無常」です。

お釈迦様つて本当に偉いですね！

★自動化の罠

ここで「仮面」仮説に戻ります。

先ほど「仮面」は複雑化巨大化する社会に適合するために膨張し、各々の膨張した「仮面」がまた他者の「仮面」を肥大化させ……という増幅相互作用について言いました。

これとともに、「仮面」にはそれそのものとして自動化（オートマチック化）と自己強化・自己増幅（ハウリング）性が、基本的性質として備わっているのではないかと、という観察があります。

これはオカルト・猟奇殺人など人間のエッジな部分について多数の著作のあるコリン・ウィルソン先生が口を酸っぱくして言うことなのですが、「人間にはある状態を当然だと思うと、客観的に明らかに異常であつてもその状態を正常だと思ひ込む機能がある」。カルト教団、連続快楽殺人、異常性癖……「なぜこの人達はこの異常な状況から脱しなかつたんだ、目を覚まさないかつたんだ」と思う事件は多々あります、日本ならばオウム真理教事件とあさま山荘事件を挙げれば十分でしょう。

そして彼らを地獄に追いやったのと同じ機能が、私たちにも備わってる。前述の幾多の「狂気」は作動原理はこれと同じです。ただ対象が違うだけで。

なぜこんな機能を持っているのか、という点については、これも僕の単なる思いつき仮説なのですが、この機能そのものはプリミティブなものは動物でも持つてます。

鎖で杭につないだイヌが、しばらく逃げようともがいて無理だとわかると、もう杭につながなくても逃げない。

おそらく世界というものは、動物の生命の時間スパンでいうと「いったん環境が決まってしまうば、そう簡単に変わりそうにない」ものなのでしょう。

だから世界認識を簡単にし、そんなことで無駄なエネルギーを浪費しないようにする、そのために「既に知っている」ことを「自動で」認識し行動する、そういう繰り返しを始終やっている、のではないのでしょうか。

ただこれが、一瞬先には一八〇度変わってる人間の社会に適応されると、ものすごい不具合を起こします。

すなわち、変化が早いのでこの自動化、繰り込みも凄い勢いで行われるわけです。どんどんと頭の中にある「虚構の世界」が強化されていく。

しかしそこへ「まったくルールが違う」現象が起きると、この自動化機構がうまく働かない、ので、本来そこでゼロから観察しなおし思考しなおし行動しなおすべきところを、あまりに優秀なこの機能に頼りすぎすつかりその「個としての能力」が錆び付いているがゆえに、「無視」（スルー）あるいは直近の現状だった過去への貼り付き、つまりフィクション（虚構）への依存、つまり「発狂」に至る。

これは僕の持論なのですが、「意識的に脳を使つての判断」というのは極めて重いタスクでして、ものすごいエネルギーを消費します。（というかあの巨大な大脳を使う⇨エネルギーを莫大に使う⇨重いタスクと認識する、のかも）

ということはカラダ的にはよほどメリットが見えてる時か、その判断そのものが快樂である時でない、やりたがらない。

ではこの自動化の罠から逃れるにはどうすればいいのか。

だからそれこそが、「世界は非線形であり、毎瞬間新しい、驚きに満ちた場所で

あり、自動化なんてできない」という認識を常に持ち続けること、なのです。

仏教では特に「わかったような気になるな」と浄土真宗でも禅宗でも古典的な天台宗でも言います。これぞ「諸行無常」を根本に持つからでしょう。今のお前は次の瞬間のお前とは違う。わかったような気になった瞬間、お前は死ぬ。

★芸術の効用

さて、で、そこで「世界が驚きに満ちた場所である」といつも思い返す、という努力目標を掲げては、これも先ほどの繰り返し、自力、「がんばりましょう」作戦になって「理屈は優れているけど実効性に乏しい」話になってしまいます。

この認識、「わあ世界って素晴らしい」が意識せずとも常に入ってくるようになるには、具体的には一体どうすれば……

そこで、芸術の登場です。

僕も一応物書きの端くれですから、何かを書いている時にふと、「これに何の意味があるのだろうか？」と思うことがあります。

それは文学に限らず、芸術芸能あるいはスポーツ、広く「コンテンツ」と呼ばれるものに関わる方ならどなたもに一度は浮かぶ疑問でしょう。

しかしいろいろ考えて結局、「……でも観てる人楽しんでくれてるみたいだから、いいか」と納得をします。

なにより自分が楽しいですし。

ここでもう一步踏み込めば、なぜ、楽しいのでしょうか、こんな無意味で、無価値で、なにも生きることには大切な価値を生み出さない諸々の行動と、その生成物が。

答えはここにありますが、それら「よくわからないもの」に触れた瞬間、ひとは強力な自動化機能によって「退屈で平坦であたりまえ」に自らしてしまった世界が、極めて多様性に満ち、知らないことだらけの、一瞬先は何が起るかわからないダイナミックな場所だ、と認識を改める、のです。

元々持っていた世界認識システムが作動し始める、と言ってもいい。

名人の落語や漫才に酔っ払いができて、ただその形態模写だけで爆笑してしまうのは、普段、街で見かけたら「酔っぱらい」というカテゴリーに自動的に放り込んで避けていた存在に強引に直面させられ、その細部を見つめざるを得ない状況になった時、その人間の可笑しな動きや言葉、行動様式に「破れた世界」を観る、世界の豊かさを、まるで酔っ払いを初めて見る小さな子どもに戻って見ることができ。だからおもしろい。

次章では、どのような芸術がより世界の再認識に効き目があるのか、それを考察します。

★発狂社会への対応

その前に少し巻き戻して、ひとりひとりが発狂からの脱出を図りつつも、今現在の諸問題に全員発狂状態でどのように対応していけばいいのか、少しだけ考えてみます。

今まで観てきたように、ここでいう「発狂」はほとんどの人にとって、「特定の場面において」発動するものです。それが社会あるいはその人の人生にとって重大な場面になるほどに発動するから難儀なのですが、それはともかく、素のまま、まともな状態であることも多い。

このまともな状態——おそらくは第三者的な立場に居ることで確保される——を相互監視的に作用させることができれば、多少は納得の行く判断も下せる、かもしれません。

裁判の陪審員制を拡張したようなイメージでしょうか。

デンマークなどでは一部の社会問題について住民自治が行われているようですが、右から左まで専門家を集め議論をさせ、最後は専門家を排し、議論を聞いていた市民達が最終的に議論・投票して決める、そうです。

専門家はそれぞれの視点に貼り付いていわば発狂してるわけです。狂人同士が殴りあってどつちが狂ってるかを争うのではなく、（もちろん専門家を利害関係者と読み替えても同じ）非発狂状態の冷静な人間が、問題をコントロールする。

再稼働に反対して民主党を離党した平智之議員（工学修士）が、根源的なことをおっしゃってました。

「（説明を聞いて）わからないものは、政治家は進めてはダメです」
むしろこれこそが「リテラシー」だと。

なんでもそうですが、技術でも制度でもサービスでも、人々にフィットして広まっていくものは、非常にわかりやすいものです。手にした瞬間、使った瞬間、その便益が理解されて、「これはいい」となる。

そうでないものは、逆にまだまだ発展途上のものですから、社会が意図的にコミットする必然性は薄い。

確かに「焼け野原から立ち直る」というような非常時には多少必要かもしれないかもしれませんが、ある程度安定している社会においては、非発狂状態の「まともな」市民、の大多数、がスツと理解できないような「難しい問題」は、「触らない」という選択が正しいのかも知れません。

といいますか、我々は日常、「新製品です！」「こんなサービス始めました！」というチラシや呼び込みを見ても、すぐには動かないわけです。

僕は携帯電話を持ったのがかなり早かったのですが、まあ親友人から揶揄されましたとも。

「おつ、できるサラリーマン！（笑）」

とか言われて。これホントですよ、これたつた九五年とかそのへん。あんな、今では誰でもが片時も手放せないほど圧倒的な便益を持つ超わかりやすいスーパーデバイスが、誰も、と言つていろいろその力を理解していなかった、のです。

いや、僕自身が、会社で、当時は商品企画屋だったものですから、

「ほらほら永田君、こんな新しい技術も体験してみないと！」

「えー、できるサラリーマンみたいじゃないですかー（笑）」

とか言つて出張に持たされて実際に使つてみて、「うわあ便利！」と慌てて買いに行つた、そんなテイタラクでした。

そんなものですよ我々の「理解力」なんて。基本的になにもわかつていないのです。

「わからない」ことを恥ずべき、無くすべき不良の状態と思ひ込み、知つたかぶりや生兵法で大怪我をするのではなく、むしろ「わからない」ことを安全装置として

活用する、ような、社会システムが、これから開発・実践されていくべきなのではないか……と考えます。

技術的に具体的にどう組み込むのか、その知恵は出しあつていかないと思うのですが、その前提条件として、基本的に、

「発狂状態の人間（専門家、利害関係者、またその代理人）にだいじなことを決めさせない」

という社会的な共通認識が必要かな、と思います。

■参 非線形芸術

★前提

さて、話を戻しまして、発狂を脱しうるお薬としての芸術とはどんなものか、考えてみたいと思います。

まずその前に、言わずもがなのことですが、本来芸術は自由であり、どのようなものでもよい、と思います。たとえ今問題にしている「発狂」「仮面」に対して何の影響を与えなくとも。むしろ様々な方向に影響のある、多様な芸術がある世界の方が間違いなく豊かです。

ですから、発狂に効くから上等、優れている、それらを目指すべき、そんなことはありません。ただの暇つぶしでも、一瞬間をしかめるよくわからないものでも、死のごとき心の平安をもたらすものでも、どんなものでも芸術はそれ自体として存在意義がある、と思います。（なぜなら人の心と身体の動きが生み出したものであり、人は孤独ではないという証明であるから……いや、こういう「意味付け」その

ものが無意味ですね、すいません)

★効くクスリ

それはそれとして、「世界が非線形である」ということを思い起こさせる芸術を
求めるなら、当然、芸術が基本的に「自然の似姿」「自然の（個を通した）再構
築」である以上、非線形の主題、構成、技巧を持つている「べき」です。

そうでない場合は世界のごく一部しか表現しきれない。

また芸術は「作者の意志の表現」である、という見方もあります。それならばな
おのこと、その作品が「自然そのものであること」が求められます。なぜなら、

- ・人間も自然の一部
- ・「不自然」なものは、再生可能・持続可能ではないので、受け手による作者の意
志の再現がおぼつかない
からです。

では具体的な実現方法としては？

「自然である」とはどのような特性を持つものなのか。
大きく3つあると思います。

●一 身体性の重視

人間のカラダそのものが、当然ですが最もプリミティブで鮮やかな自然です。アタマの中へ行けば行くほど妄想世界に突入し、生の自然から離れていく。

身体性を重視する、もしくはは結果的に身体性から発する官能性を感じられるもの。

●二 一回性の重視

二度と同じことが起きないのが自然です。季節は巡ってきますが、絶えずゆらぎ、去年の夏は今年の夏とは全く違うものです。この瞬間は二度とやってこない。だから先も予測不能。論理（ロジック）と構成（ストラクチャー）に過度に依存した「カタチ」の強固なものは、不自然になつていきます。

●三 個別性の重視

つくるからには「そこにしかないもの」を目指すこと、つまり「自分にしかつく

れないもの」をつくる、そのつもりで立ち向かう、のが大変重要です。別の何かと交換可能なものなら、それを手にすればいいわけで、作る必要もなく、観てもらい必要ありません。仮面の下にある生の自分を曝け出す。

「非線形」とはただランダム、無茶苦茶ではありません。ただのカウンター、「外し」では記述しきれません。

線形な世界が破綻するその瞬間こそ、「世界」が実感を持つてかいまみえる「とき」です。

(ここをもつて近松門左衛門師匠は「虚と実の皮膚のうちに芸がある」と指摘したのではないかと思えます)

先ほどの孔子の知、親鸞の救いと同様、線形なものが非線形になる、この運動そのものが「非線形」の認識です。

であれば、「描くべきもの」「はこの運動、「うごき」そのもの、ということになります。

簡単な例を出せば、僕も横好きでイラストを少し描いたりしますが、「いい絵」にはドラマがあります。それを観た者が想像力の翼を羽ばたかせ、別世界へと思いを馳せるような。

そのドラマこそ込められた「うごき」。

こういう特質を持つ、あるいは持たされた芸術こそが、今この仮面の危機に対する処方箋になる、と思います。

この特質を具体的に作品に落としこんでいく技術や方法論は、それぞれの芸術分野で個々が開発していくしかありません。作り手ひとりひとりに得意不得意好き嫌いがありますし、なにより、その動きを描写しようとして一回一回もがき苦しむこと、それ自体が芸術そのものだから、です。

★セントラル・テーマ

ただし、前述のように人間に「仮面を被る」習性が宿命的にあるとするなら、そ

の「仮面との相克」こそが、人間にとって常に、どの時代でも老若男女、普遍的な
いわばセントラル・テーマになるでしょう。

『アンナ・カレーニナ』に『忠臣蔵』、アタマで考えればロクでもない話なのですが、これらが人々を引きつけ続けるのは、「立場」という仮面と「本心」という生の自分との相克、葛藤がテーマになっているから、ではないでしょうか。

■肆 自分自身で作る「非線形文学」

★文学は「やるもの」だ！

歌や絵と同じです。

予定調和、線形な状態が一気にカオスに破綻する、その瞬間の見極め（観察）と指摘（描写）が、文学のすべてです。

が、言い過ぎであれば少なくとも心臓であつて、この見極めと指摘なら、誰にでもできることです。その先の、言葉の使い方とか構成とかそういうものは枝葉末節です。飾り、味付けにはなりますが、本質的な「美味しさ」には関係がありません。

なによりも、自分の中にある感情や想像を文章に形作ろうとする、この運動そのものが、「自分自身に還り」「自分の仮面を意識し」そして「自分の仮面を突破する」ことそのものです。

ですから文学を試みる時人は、知らずして仮面を破るといふ快樂、しあわせを得

ることができます。

逆にその快感を味わえないような文学活動は、まだまだ甘い。俗に言う「パンツを脱いでない」状態です。

小難しく言ってますが要は、

「王様は裸だ！」

という叫び、これが文学です。

簡単でしょ？

なぜ文学をオススメするかと言いますと、歌に対するカラオケと同じ、文章を形作る人が増えれば、「なにが優れた文学なのか」をよく識る人が増えるに違いありません。歌つてみれば、歌い手の技量や歌のココロが伝わるように。

そうすれば結果的に、「仮面の相克」についての理解が深まり、そこを突破する機会が増えたり、自分の仮面を軽くしたり、できるのではないかな、と思うのです。

カラオケを愉しむ人を「歌手でもないのに」とバカにする人はいませんよね。それも歌の楽しみ方のひとつ、いや、本来歌は歌うものです！

文学も同じです。自ら書くもの、作るもの。読むだけではもつたないですよ。

★「やりたいこと」に正直に

個人的な話を少しします。

僕も一応仕事でやってますので、作品を形作る方法論に思い悩んだ時期もありました。突き詰めればその「悩み」は、相反する3つの要素の相克にあります。

(A) 自分のやりたいこと

(B) 絶対的完成度

(C) ウケる（ホメられる）

全部満たせればこんなに嬉しいことはないのですが、そう簡単にはいきません。どれか一つでも追い込むのは大変なのに、これらは三すくみになって引つ張り合うことが多く、あちらを立てればこちらが立たず、重心や重み付けに悩み始めると本当にどうにもなりません。いわば芸術における「三体問題」で、解が出ないのなん

の。精度上げれば上げるほどカオスな解になっていくあたり、本物の三体問題に似ています。

散々悩んだ挙句最近僕が採用した解決法は、

「(A)だけ追求する」

という極シンプルなものでした。

え？ 解決してない？ ごもつともです(笑)

まあ聞いてください、これらに無理に優先順位つけるとするならば、発狂している専門家である僕ではなく、みなさんが「ふつうに」考えて

(A)▽▽(B)▽(C)

こんな感じですよ。ちよつと力がついて中途半端に色々やれると欲が出て、余計なことに手を出して破綻するんです。

ということ、まして自分の心のやすらぎのためにやる「じぶん文学」であるのなら、(A)だけまっしぐらに考えていい、と思います。

またこれこそが文学の他の趣味には無い「強み」かもしれません。どんな趣味でも「さすがにこの基礎がないと」先へ進めない、という技術的・物理的ハードルがあるものです。弦張つてないギターを鳴らせるのは相当なパフォーマンスですが、文学にはそういうのが無いので、だれでもいつでもどこでもできます。

実は僕もこつそり「メキメキ書ける小説入門」みたいな本をたくさん読んだのですが、(B)と(C)に関わる技能の本ばかりで、(A)を説くものはほとんどありません(無いわけではないです)。

ですが僕は、(A)こそが文学そのものである、と十数年のキャリアを過ごし何万枚も書いて衷心から思います。

だから、誰にでもできますよ。

★ご参考・ながたの場合

ご参考までに、私の具体的作品作りのイメージを。

作品にとつて「ここがポイント」というシーンはおのずから浮かび上がるもので、というか、そういうコアになる、軸になる「なにか」が無ければ作品になりません。

それが浮かんだら、あとはそこへ向かって一直線に描写して、描写しているうちに浮かんでくる諸々に対してまた描写を繋げていく……という感じです。

構成ありき（たとえば起承転結）で、「必要な部品」を興味もないのにコツコツ用意するよりも、パツと思いついたいいイメージを膨らませて、それぞれの接続の仕方はまあ適当にゆるく。

司馬遼太郎先生の文学もこんな感じですよ。

おそらく「文章を書くのが苦手」な方は「きっちり構成しなければ読みにくい」という恐怖心に囚われているのではないでしょう。そんなことないです。「読みやすさ」というのはすなわち「イメージの伝わりやすさ」であり、自分の中にビビッドに現れたイメージを新鮮なまま描いていけば、多少ロジックが通ってなくても伝わるものです。

インターネットのコンピュータ・ネットワークを可視化すると、たくさんのノード（端末）を引き連れる大きなハブもあれば、単独でどこんまりどこかにぶら下がっているノードもあります。それらの塊をクラスタと言います。ある強いイメージが湧けば、その下に多数のイメージがぶら下がって、大きなクラスタを形成します。それら大小のクラスタを最後になんとなくゆるくまとめ、ひとつのネットワークつまり作品が完成する。

できあがりには、そんなイメージです。

後述する「魂の感じる一点」ににじり寄り、それがイメージできれば今度はそこから想起されるたくさんのイメージをぶら下げて、ひとつのネットワークつまり世界を作る。

この探求と拡散の運動の繰り返し。

作品作りのみならず、私達が普段、「世界を認識する」ときにはこういう運動を繰り返し広げているように思います。

ナビの地図を見る時、ズームイン・ズームアウトを繰り返して、細部と全体像を同時に把握しようとしています。パソコンでCGを描くためのグラフィックツールを使うときも。

これが人間の基本的な認識方法なのかもしれません。

■伍 魂の求める一点にじり寄せ!

★魂は識っている

「★効くクスリ」の節でどのような芸術が「効く」のか見ました。そして「自分でやる芸術」という考察を経ました。

今度はそれを、一般的な世界の認識の仕方に広げてみたいと思います。

水の沸騰をイメージするとわかりやすいのですが、水が液体である状態が、徐々に温度が上がって一〇〇度を超えると気体になって勝手に飛び出していきます。

この液体の部分が線形の部分、気体の部分が非線形の部分、一〇〇度がそれを分ける「ブレイクポイント」と考えましょう。

世界はこのように、ある点までは予測可能な動きをするのですが、ある一点で突然破綻し、全く違う動きをするようになります。

(こちらはこちらで完全な混沌ではなく、「別のルールで動く」というのが適切で

しょう)

線形の部分ばかり睨んでいても、世界は掴みきれません。現代は情報の流通量と流通速度が凄まじいので、「予測可能」な部分、積み上げていけば積み上がる部分の追い込み方は物凄いものがあります。

枝葉末節、小指の先に至るまで、発狂してない冷静な第三者からすれば「そこまでする必要があるのか」と思うほどキラキラ輝く細工豊富なミクロの仏像ができます。

僕も同人誌即売会に出るぐらいですから、二次創作のイラストやマンガをよく拝見します。素晴らしい技術と丁寧な仕事に感服することも少なくありません。

ですが、それらはどこまで行ってもオリジナルを超えることはできない。なぜなら、オリジナルの持つ世界を借用してその中で展開している小世界だからです。原理的にその枠を超えることはできない。

ので、この場合、オリジナル作品をよく知っていれば足りる、ということになります。

だからここを、必死で詰めても、得るものは無い。「少ない」ですらなく、「無い」。

テストで九五点を九九点にするのに膨大なエネルギーと時間が掛かるように、膨大なコストが投入されてる割にはアウトプットの質的変化が無いから、です。

逆に気体になったあと、別のルールで動くようになった状態に目を向けましょう。こちらはこちらで、そのルールを見出すことができるまでは混沌にしが見えず、個々の事象をいくら単独で研究しても、全体像を把握できません。つまり、世界がさっぱりわからない。

先の例と対比させるなら、パツとしない現代芸術はどうでしょうか。個々の作品としては「んっ？」と思うものがあつたとしても、それらの間に大きな流れや普遍性、一般性が薄く、簡単に言えば自分の人生に引き写して捉えることがやりにくい、またはできない。

この場合、それを自分の中に取り込んで豊かな体験として消化することができません。いわばジェットコースターと同じ、一時的な目眩ましに過ぎない。

(もちろん先述通り、このふたつの例は「だからダメ」ということではありませ
ん)

ではどこを見るべきか、といえばブレイクポイントの周辺、いままさに水が水蒸
気になろうとする部分の動き、このダイナミズムそのものです。

ここに生命が凝縮して出現している。

芸術であるならばここをこそ大きく描写すべきですし、商品・サービス開発なら
人の生活を沸騰のようにガラリと変えるもの、を目指すべきです。

iPhoneがやってきた時、いわゆる当時のガラケーと比べてあそこが悪いところが
足りない、という議論がありました。

これは線形の部分のものの見方を非線形部分に当てはめているわけで、意味のな
い虚論です。

しかしiPhoneも瞬く間に似たようなスマホの間に埋もれ、「スマホ」というル
ールの中で線形部分に位置してしまいます。だからまた一歩抜きん出るには、ブレ
イクポイントを超え、人々の生活を変化させるような「なにか」を持たさなければ
ならない。

いままでのところ「四倍密ディスプレイ」や「音声認識」など、その時に応じて（実効性はともかく）「あつ、これは全然違う」と思わせることには成功しています。そこで「CPUスピードアップ」とか「メモリ容量アップ」という線形議論をすれば、その他大勢との殴り合いに巻き込まれるわけです。

最もわかりやすい例を挙げましたが、「うまくやってる」商品やサービスはやはりこのブレイクポイントをいつも狙ってきています。

ですから我々も、世界を認識する時にはこの、「ブレイクポイントはどこか」に気を配ると、少しはわかりやすい。

では、「その破綻点をどのように見出せばいいのか」という議論になれば、「それは暗黙知であつて、魂の内なる声に耳を傾ければ、自然とわかる」。

「なんだそりゃ！」と声が飛びそうですが、待ってください、先の文学の項で「あたりまえの日常が破綻する点」を見出す、と言いましたが、それならできそうですよ？

王様はどう見ても裸じゃないですか。

これが魂の声です。

でも周りの人だれもそう言わないし、みんな綺麗な服だつて褒めてるし……

これが仮面の声。

簡単でしょ？（笑）

私達は、といますか僕は特に、ここをすごく難しく考えて、「この破綻点を見出す（記述する）方程式があるはずだ」とずっと探していました。

が、僕の能力と努力の範囲では、ありません。

というよりも、現在の非線形科学に則れば、ゴム紐を伸ばして伸ばして切れるのがいつか、すらわからないように（複数を実験して統計的にどのぐらいで切れるかは予想できませんが、個々のケースについては計算できません）、この破綻点とは本質的に記述できないものなのです、というより、記述できないからこそ破綻点というわけですが。

悩むなら、考えこむなら、そこは破綻点ではありません。仮面が囁く嘘の情報です。

ただ見出す、見つける、強いて言えば絞り出す。

つまり「魂の求める一点」のみににじり寄っていく、しがみついていく、これが「世界を識る」ということです。

この姿勢と覚悟、これを謙虚といい、自立・独立・非依存といいます。Self-reliance。

ですからこの「魂の求める点」、すなわち進むべき「道」、それはすなわち「進化への意志」、これを持たないものつまり、傍観者の評論には、意味も価値もありません。関わるだけ時間の無駄。暇つぶしがしたければパズルでもやってる方がマシです。

しかし人間は、線形の部分の詳細議論について、やりやすいだけに没頭・愛玩・執着しがちで、自らは何も生み出さないこの「最適化方法論」みたいなものに拘泥します。

似たような商品から一つを選ぶ。

しかしどのような商品もサービスも、過剰最適化が起きて恐竜のように妙な進化をしたものや、無理に差別化を計るために細部に妙な作為の入ったものは使いにく

く不自然です。

もちろん逆に過剰最適化が行き着き過ぎてプレイヤー数が淘汰され二、三の似たような選択肢から選ばなければならぬ状態を強制される熱的死もまた、多様性がなくつまらない状態です。

逆に言うと、その多様性、「豊かさ」をキープし続けるためには、過剰最適化が起きないようにルールを変え続ける必要がある。

それは独禁法などの政策やシステムなどで外部から強制することもあってでしょうし、iPhoneが携帯電話に対して仕掛けたように内部からイノベーションの形で起きることもあるでしょう。

それを自分の日常に引き入れてみれば、「ゲームのルール」に気をつけ、いつルールが変わっても対応できる心構えをしておく、ということに他なりません。

前述の「学習回路を開いておく」ことと同義です。

「あるゲームの中での勝者を選択する」
線形な毎日ではなく、

「勝者が入れ替わるようにゲームのルールを変えていく」
非線形な日々を、自分自身に仕掛けるのです。

理由は、その方がおもしろいから。

F1でもMLBでも、発達したシヨースポーツは常にゲーム全体を包むルールを細かく変更することで、「強者が常に強者である」ことを否定します。

その方がおもしろいから、です。

個人スポーツなら加齢という自然作用によって強者の入れ替わりが起きえますが、チーム商業スポーツの場合、強さが人気⇨収入を呼びいい選手を集めてまた強くなる、という強者の肥大化が自動的・物理的に起きます。

だからこそ、これを意図的に避けるルールを仕込んでおかねばならず、しかもそれを常に見なおさなければならぬ。

そうしなければ「いつも同じ者が勝つ」という退屈なシーンが続いて、お客が離れ、果てはその興行自体が成り立たなくなつて、弱者も強者も全て滅ぶ。

余談ですが、あまり文化的な決め付けはすべきではないと思いつつも、日本人はこのメタ思考的なものが極端に苦手で、「それはルールを変えればいいじゃない」

という物の考え方を凄く嫌います。

読み齧り知識ですが、石原莞爾のような超エリートでさえ「憲法改正」や「皇制廃止」というルール変更には思い及ばず、「皇太子を我々の思う通り教育して……」などと大変回りくどいことを考えていたらしいです。

その理由はわかりませんが、変化していくかどうかどうかも不明なのですが、ともあれ事実としてその傾向がある以上、頭の片隅に置いて警戒するに越したことはありません。

二〇一二年現在の日本の閉塞感の大きな要因のひとつがこの、「ルール変更がまならない」という点ではないかな、と思います。

■陸 笑顔の力

★笑顔

サッカーの内田篤人選手は可愛い顔立ちで人気が高く、同世代の同じ欧州で戦う日本人選手たちの間でも「可愛がられ役」としてなにくれとなく弄られています。

まとめサイトなどでそんな彼と、友人達、吉田麻也、川島永嗣、長友佑都、長谷部誠、安田理大、カレン・ロバート、本田圭佑、チョン・テセ……が集まつてる写真を見てますと、本当にみんな「いい笑顔」なんです。

これこそが「仮面を被つてない」顔なんじゃないかなあ、と。

肉体的にも精神的にも大変厳しい仕事ですし、向こうでは外国人選手ですから一寸先はクビ。不安やストレスを感じないわけではないのですが、それ以上に「魂の求めるしあわせ」を一心に追求する喜びに溢れている、そんな笑顔です。

……と、書いていたらサッカー日本女子代表もロンドン五輪で銀メダルを取り、皆さんご覧になりましたかあの表彰式での素晴らしい笑顔・笑顔を。決勝で激闘の

末アメリカに敗れたわけですが、まるで勝者かのような喜びようでした。

いや、「本当に好きなことを思い切りやりぬいた」彼女たちこそ勝者なのでしょう。

ああいういい笑顔がしたい。

それがこの短文を書いた、僕の理由かもしれせん。

魂のしあわせを追求するには、まず分厚い仮面をできれば突破、なるべく薄く、外せないならたまにつつかえ棒をかまして浮かせて生の顔に新鮮な空気を……そのためにはどうすればいいのか。

それをいろいろと考えてきたつもりです。

だから、ここまでのいろいろが腑に落ちなくても、つまりはあなたが彼ら彼女らのような「いい笑顔」になりたい！と思えば、そのためにどうすればいいのか試行錯誤し続け、すこしずつでも笑顔の量が増え質が高まれば、僕としてはこんなにしあわせなことはありません。

また、（多くの文学作品がおそらくそうであるように）これは自分自身へのメモでもあります。

セクハラが「されたこと」ではなく「された相手」によつて規定されるように（笑）、僕自身がいい笑顔を見せながら語らなければ、この短文に説得力が生まれません。

僕は「自分さえよければいい」と（コンプレックスを感じるほど）思い過ぎるのですが、裏を返せば自分が楽しくも無いのに他人様を喜ばせるのは至難の業。

しあわせそうに生きている人の言葉に、やっぱり人は耳を素直に傾けるものです。なぜなら、自分もそうなりたいから。

だからまず自分が魂のしあわせをひたすら追求するよう、すこしずつ変わっていきたくところです。

もちろんこの運動自体がしあわせ、でもあります。

この発狂した社会を具体的に整理・改革・革命していく方法論は、そういうことに飽くなき情熱と他者への衷心からの優しさを持つ人々におまかせして、僕らは彼らを物心両面で「応援」すればいいと思います。

正直なところ、個人がすべての社会的な問題について知識を蓄え、ワークシヨツ

プ討論会住民投票などでコミットし続ける、というのは物理的に大変難しい。

だからそういうことに真剣に取り組んでいる、徳心ある政治家やNPO・NGOの人々、「信じられる」と生の自分が囁く相手に「おねがいます」と託せばいいのではないか、と思います。

一番良くないのが「わかったふり」をしてただの印象で、たとえば投票などの意思決定をしてしまうこと。

今の発狂社会システムでは「正しい情報」を得ることなど実質不可能です。最も良い例が原発震災で、事故後しばらく、いや今でも、「炉心がどこにあるか」はわかってません。

ここで一番問題なのは、「『わからない』ということもわからなかった」点です。東電や政府は「メルトダウン」という言葉のインパクトを恐れてかそれを使ったがらず、しかし多少知ってる専門家なら冷却が回らなくなっていれば間違いないメルトダウンしてるはずで、しかしそう発表されないとすることはしてないのか……と議論が事実から離れ、虚空を舞い続けました。せめて、

「どうなってるかわかりません！」

という正確な情報が流通すれば、最悪のケースから最もマシなケースまで様々な予

測を立てそれに基づいて行動も取れましたものを。

ですから、「自分がなにかを知っている」と思い込むことは、生きていくうえで何よりも危険なことだ、と思います。

僕も、自分が発狂していることを四〇年も知りませんでした。

すなわち、「自分」についてさえ何も知らない。

くりかえしますが孔子様がおっしゃるように「知」は知ろうと探求し続けるその姿勢と行動そのものです。知った、と思つた瞬間にそれは「知」ではない。

★身も蓋もない

仮面の暴走によって引き起こされる感情のひとつに、「不安」があります。悪い相互作用があつて、不安が発狂を呼びますし発狂すると不安が深まります。その最たるものが、

「そんなことになつたら生活できない！」
という叫びです。

えとですね、僕業界一〇位の弱小電機メーカーと零細PCゲームメーカーに勤めた経験ございまして、そういう場面では、人は簡単に不要になりますし、クビになります。

そうやって状況の変化に対応していかなければ、企業そのものが潰れてしまうからです。

しかしそれでいきなり路頭に迷ってはさすがに可哀想なので、失業保険が義務付けられ、最終的には生活保護がある。

それはだから単なる「思い込み」「思い込まされ」なんです。

安富先生がおっしゃってるのですが、いま日本人は一年に六〇キロのコメを食うと。コメはスーパードで一〇キロ三〇〇〇円も出せば買えます。ということは一年間一八〇〇〇円あれば暮らせる。

このぐらいなら実家はもちろん、友達四人巡って五〇〇〇円ずつカンパしてもらえば生きていけるわけです。

ここでポイントは、なんだか処世訓じみてますが、そういう友達が四人居て、彼

らに五〇〇〇円出さしめる自分、もしくは彼らとの関係、を構築する、これが重要なのです。そうでないと貯金通帳に一八〇〇〇円入つてゐることに依存する人生になつてしままい、これはもう他者（政府なり大企業なり）の思う壺。その「不安」をテコにしてどんな行動でもさせうる。

「人間二万あれば生きれるよ」

というこの「身も蓋もない」事実に対して、人はなぜ目を逸らすのでしょうか？

いろいろな原因は考えられると思うのですが、最初でかつ最大のもののはやはり、「魂のしあわせ」をまつしぐらに追求していかない」からでしょう。

すなわち、大切なことに没頭してないから。どうでもいいことが気になるから、やれあれが欲しいこれじゃ嫌だ、「小さな差異」に拘泥してしまう。

サグラダ・ファミリア建設を監督中のアントニ・ガウディが通勤中に路面電車に轢かれ、あまりに身なりがみすぼらしいので浮浪者と間違われて手当が遅れた、という逸話があるぐらいで、本来、まつしぐな人は浮世に金は不要なものです。

魂のしあわせを追求すると、だから「それ以外」についてはほとんど「身も蓋もなくなつて」いく。いいよコメ六〇キロで暮らすから。

となれば逆に、「身も蓋もない」考え方や行動を意識的にすることで、自分の生
活から本来不要な枝葉末節を切り落として、向かうべき対象をクッキリ浮き立たせ
ることが、できるのではないのでしょうか。

カタチを整えるとそれっぽい人間になっていく、とは『徒然草』はじめ古来よく
言われることです。

というよりもさらにいえば、前述のように注視すべき点は「線形が非線形に移る
ブレイクポイント」であって、「お金掛けたら綺麗になった」的な線形領域は別に
適当にやってればいいわけです。もちろんわざわざ否定して回るのもエネルギーの
浪費なので、「適当に」。

「身も蓋もない」というのがこれまた言葉として凄く意味深長でして、「身」とは
身分、「蓋」とは仮面、と考えると、まさに「生の自分を覆い隠すものふたつ」で
す。これらが、ない。

これは実にすばらしい状態ではありませんか。

発狂状態、すなわち「身」 社会的地位に依って立つ発言、ポジショントークと、「蓋」 営々と作り上げた厚塗りを繰り返した社会用非自分人格仮面、に覆われた人に対して、われわれは「身も蓋もない」言葉と態度で、

「王様……裸ですよね？」
と指摘しましょう。

発狂状態は悪でもなければ無知でも怠惰でもなく、つまり醒めればマトモに戻るわけです。おたがいに発狂を発見したら、「ミもフタもない」攻撃で「狂ってるよー」と教えてあげる。

最初はそのこと自体がさらなる発狂を引き起こすのですが、これを繰り返す社会がそういう人と行動で満ちていけば、その指摘も受け入れられやすくなるのではないかな、と予想します。

なにぶん近代以降人類初めての試みなので、どのような流れが待っているのか、見当もつきません。

ですが発狂に対するなら冷静しかなく、そのキーワードはやはり、「ミもフタもない」でしょう。

……あまりに社会が複雑・高度・高速度になりすぎて、我々は知らずにパニックに陥つてるのかもしれない。僕みたいなフリーでのんびり実家で暮らしてる人間でさえ、ものすごい量の物質と情報が毎日通り過ぎていきます。ものすごいゴミが出ますし、たぶん一日のネットの通信量を見るとすごいことになってるでしょう。ほんの二〇年前には考えられなかった事態です。

それがおそらく引き起こしているのは「優先順位づけの不可能化」で、つまり、「なにかから手をつけていいかわからない」そしてそれより恐ろしい、「なにがだいいかわからない」。

NHK『ためしてガッテン』で観たのですが、振り込め詐欺に引っかけた被害者は銀行にて、窓口のお姉さんがかおしいと見抜き「止めた方がいいです、確認を」と諭してももうパニックになっており（そういう説得（洗脳）テクニクがあるのでしょうか）、最後には

「詐欺でもいいから振り込ませてくれ！」
と絶叫するそうです。

完全に優先順位とか「一番大切なもの」とか「見失わされている」。

私たちだつてその時になれば同じ行動取るかも知れませんが、フィギュアやBDで「完全予約制」と書かれるとオロオロしてしまいますしね……

だからこの自体を避けるためには、おたがいに「ミもフタもない」領域を持つ者どうしで相互指摘するしかない、ような気がします。

「醒める」という状態は「悟り」に似てますよね。多くのトップ宗教家が厳しい修行「中」ではなく「そのあと」に「悟る」んです。

つまりガーツとのめり込む発狂時期のあと、ぽかーんと距離をおいて「醒めた」時に、「あつ」と全体像を把握できる、のではないのでしょうか。

そしてこの「醒める」という動きにもまた、「笑顔」、笑いが効果的だと思います。

発狂状態で人間はギチギチに緊張状態にあります。この緊張をほぐすのに、「笑い」という身体活動以上のものは無い。笑いながら怒れる人はかなりの上級者です。ですからここでもまた逆に、「カラダが笑うと↓ココロがほぐれる」、という作戦が使えそうです。

おもしろいものを見たから笑う、のではなく、「これはおもしろいのではないか」と自ら働きかけて笑いを自分から生み出す。

すると、線形の部分からポン、と非線形領域に跳び移れるように思います。

イメージとしては、人間の精神はバネのようなもので、ある領域で極限に追い込むかのようにグーッと押し込んでいって圧力を溜め、笑いによってぽっ、とその力を抜くと、びよーんとぜんぜん違う領域に向かって跳ぶ。

このジャンプこそが全く新しいものを生む「創発」という動きそのものなのではないかな、と考えます。

「笑いとは緊張と緩和だ」

と喝破したのは桂枝雀師匠でした。古典落語がどの噺も間違いない人生が描かれているのは、逆説的な言い方ですが、「笑い」があるからです。

★みずから！

安富先生は『幻影からの脱出』にて、この発狂した世界から抜け出す希望として「我々の希望は子どもたちだ！」とおっしゃっています。

確かに赤ん坊はみんな仮面をつけず、魂を縛りつけずに生まれてきます。

私達は彼・彼女に、社会生活上必要最小限の仮面のつけ方とできれば外し方を教え、できるだけ自己欺瞞、自分に嘘をつくことのない人生を送ってもらおうようにしなければなりません。

それがこれからの親、先生、教育システムの使命でしょう。

彼ら彼女らが大きくなって社会を動かす時、少しずつ「発狂していない世界」が築かれていくに違いありません。

子どもと直接関わらない人もまた、「自分に嘘をつかない」という日々を過ごすことで、分厚い仮面が少しでも少ない社会にしていくことができます。

と同時に、ちいさな子どものみならず、「魂に嘘をついてない」人々を見つけては、その姿勢から積極的に学び、彼ら彼女らをなんらかの形で応援し、なにより自分自身の魂を、仮面の下の息苦しきから解放してあげるべきです。

チエ・ゲバラに憧れるなら、Tシャツ着るのもいいんですけど、ゲリラになるのが一番です。

AKではなく自分の魂を武器として、分厚い仮面をつけた看守の守る虚構の城を攻めるのです。

恐れることはありません、彼ら彼女らに君を害する力などありません。せいぜい口で悪態をつくぐらいで、あとは四散して逃げ去るだけです。

君の魂を犯すものは誰も居ません。

ただ君自身を除いては。

■ 柒 これからがはじまりだ

以上駆け足で見えてきましたが、いかがでしたか。「頭のフタ」はすこしでも開き
ましたでしょうか。

まとめますと、世界は発狂してしますので、僕（あなた）も発狂しているのです。
だからあなたの言葉、「王様は裸だ！」は虚空に消える。

立場やしがらみといった「仮面」上、見えないふりをする人もいます。もつと重
症の人は仮面が分厚すぎ、またそれに依存しすぎて、見えもしない。本当に王様が
綺麗な服を着ているように錯覚してしまっている。

この総発狂状態から覚醒するには、どうするか。

それには三点、「ハラスメントをしない・させない」「魂のしあわせを追求す
る」「学習回路を開いておく」が効く。

これらを楽しみのうちに実現できるのが、いい芸術、僕が「非線形芸術」と定義
した、世界がガラリと変わるブレイク・ポイントを捉えた芸術の数々に触れること、
です。そのひとつである「文学」なら、今日からあなたもできます。「ここで世界

のルールが変わる」という破綻点を観察し、指摘する。そうまさに「王様は丸裸だ！」と叫ぶ。

こうした人々が増え、おたがいの仮面を指摘し合い外すお手伝いをし合い、仮面の無い人軽い人を応援し、子供たちに重い仮面を被せない。生の自分自身として世界を観て、その魂で判断し、行動する。

いつの日にか、そういう人々がある一定以上の割合に増えた時に、一気に世界は生氣と多様性を取り戻す……

それまではひとりひとりが自分の「抗発狂薬」を自分で作り出し、時を見て服用しつつ、真実を見極めようとする意志を持って、身も蓋もない言葉を周囲に撒き散らし続けるしかありません。

偉そうに言ってますが僕自身、三・一一でヘーベルハウスのCMよろしく四基の原子炉が「ハイイ」するまで、真実などこれっぽっちも観ようともしてませんでした。これからもフト気を抜くと、観ようとしなくなるでしょう。

つい先日(二〇一二年七月)田原総一朗さんがあるweb媒体に「アメリカ行ってきたんだけど、シエールガスって凄いな」なんてことを書いておられて、腰が抜け

ました。

大変な影響力のあるヴェテラン・ジャーナリストが、シエールガスのことも知らずに、原発問題のTV番組の司会をする。一二年七月ですよ。一二年ならまだしも。

何度でも孔子様の言葉を繰り返しますが、「『知る』とは知ろうとする運動」のことです。その運動を止めた瞬間、その人にいくら雑駁な知識のストックがあろうとも、その人は「無知」です。

この複雑にして変化の速い世界には、もはや「すべてのことに通曉した権威」などどこにも居ません。

自らの狂気（虚構へのすがりつき）を晴らすには、自ら真実ににじり寄り・つかみ取り・しがみつくしかありません。

……と、いうようなことを様々教えて下さった安富歩先生に感謝しつつご著書ご紹介。

安富歩 『原発危機と東大話法』（明石書店）

安富歩 『幻影からの脱出』（明石書店）

の近刊二冊は特にお薦めです。

孔子様のお話は

安富歩 『生きるための論語』 (ちくま新書)

現在のメインストリーム経済学がどれだけ「虚構」なのかの証明は

安富歩 『生きるための経済学』 (NHKブックス)

あたりを。他

安富歩 『生きる技法』 (青灯社)

安富歩・本多雅人 『今を生きる親鸞』 (樹心社)

安富歩 『経済学の船出 創発の海へ』 (NTT出版)

も頭のフタがズラされる一品です。

全く余談ですが安富さんは大阪・住吉のご出身で僕もすぐ近くの東住吉、同じ大学の同じ学部で経済学本流に疑問を持ち、大手企業に勤めその盲点っぷりに辟易し三年弱で辞めたところまで同じ。とても他人事とは思えないといえますか、まるで自分がやるべきことを代わりにやってくださったみたいなの、そんな妙な感覚に囚われました。人生、変なことが起きるもんです。

国一合格者の省庁廻りや司法任官の現場では「夢や希望や理念や野望のある人間から落ちる」という絶望的な話も風聞します。

分厚い鉄仮面で地位を築いた人間は、人間ではなく仮面を求める。当然の帰結です。

結果、真面目で・頑張る・優秀な人ほど世間と世界と自分自身の狂気の圧力に耐えかね、矢折れ力尽き鬱になつて死ぬ。

これでこの国が、いやこの世界がよくなりますか。

僕の与太話なんかどうでもいいですから、「疲れたな」「話を通じないな」と思つたら安富さんの御本を読んで「……そうか、世界もおかしいけど俺もおかしかったのか」と安堵してください。

常に問題は、「現状」じゃないんですよ。「現状が把握できないこと」が不安と孤独を生む。

全員発狂、あなたもわたしも、と知るところから、復活ははじまるのです。世界はあなたの正気を待っている。

長々お読みいただきありがとうございます。あなたの頭のフタがぱっかり開きますことを。

二〇一二年夏 永田和久

■ 奥付

「抗発狂薬」

作者 永田和久

発行 サークル 「PowerNetwork!」

発行日 2012.8.20

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata



Anti Madness Medicine
Powered by Kazuhisa Nagata